

筑後國府跡

—第243次発掘調査報告—



平成23年（2011）12月

久留米市教育委員会

序

久留米市は筑後平野の中心付近に位置し、耳納山地の縁と筑後川の水など、豊かな自然に恵まれています。平成17年2月の広域合併後、平成20年4月には中核市となり、福岡県南地域の中心都市として発展しています。このような発展を築き上げてきた先人達は、多くの文化を創造し、市内各所にはその足跡である貴重な歴史遺産が多く残されています。

本書で報告する筑後国府跡は、現在にいたる久留米市の発展の礎となった古代の行政機関で、昭和36(1961)年には、全国に先駆けて国府政庁における発掘調査が九州大学によって行われました。昭和47(1972)年以降は本市教育委員会が継続して調査を実施しており、長年の調査成果は全国の官衙研究に新たな情報を発信し続け、注目されているところです。今回の調査では、筑後国府が盛行した奈良～平安時代と、その後の中世の遺構・遺物を中心に多くの成果が得られました。

今回の発掘調査とその成果を収録した本書の発行によって、地域の歴史解明、さらに文化財保護の理解や普及、生涯学習等に多少なりとも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・本書の発行に際しまして、多大なご理解のもとにご協力を頂きました積和不動産株式会社や関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成23年12月28日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、宅地造成に先立ち積和不動産株式会社の委託を受けて実施した、筑後国府跡第243次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査に係わる事務は久留米市教育委員会の委任を受け、久留米市市民文化財保護課が執行し、調査は文化財保護課の神保公久が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、神保・田中樹子・橋原初美・藤本幸子・丸山 幸・渡辺しげ子が行った。また、本書に掲載した遺物の実測は、非常勤職員の古賀和子・米澤美詠子、臨時職員の林 知恵が行い、図面の浄書は神保と米澤が実施した。
4. 本書に掲載した遺構写真は、マミヤRB67を用いて6×7判で、遺物写真はデジタルカメラを用いて神保が撮影した。また、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（旧座標系）を基に作成し、図面の方位は座標北を示す。
6. 本調査の略記号はTKH243、調査番号は201103である。
7. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
8. 遺物観察表の凡例は下記のとおりである。
口径（長）・底径（幅）・器高（厚）の単位はcmである。（ ）内の数値は現存または復元値を示す。
色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1997年版）による。
登録番号は、久留米市市民文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。
9. 本書の執筆・編集は神保が担当した。

本文目次

I. はじめに	1
II. 筑後国府跡の立地と概要	2
III. 調査の記録	4
IV. まとめ	25

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、宅地造成に伴う事前の発掘調査である。平成23年3月7日、積和不動産株式会社より、久留米市合川町字立石407-1、408-1における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である筑後国府跡に含まれ、周辺では平成12年度に第173次、平成16年度に第197次・198次調査、平成17年度に第212次調査、平成18年度に218次調査が実施されている。これらの調査では、奈良～室町時代にいたる多くの遺構群が検出されており、中でも対象地南側において筑後国府城を東西に走行する官道が検出される可能性が高いことが想定された。その後の確認調査でも土坑やピットが検出され遺構の存在が確認できたことから、造成地内の道路建設予定地について発掘調査が必要である旨を回答した。協議の結果、調査費用を原因者負担とし、4月12日に地権者から「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、平成23年5月9日に積和不動産株式会社と久留米市長権原則は「筑後国府跡第243次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。現地調査は、平成23年5月24日から8月1日に実施、出土品整理・報告書作成に係わる契約は12月28日までである。

2. 調査に係わる体制

調査委託：積和不動産株式会社

調査主体：久留米市教育委員会 教 育 長：堤 正則

調査総括：市民文化部 部 長：辻 文孝 次 長：佐藤光義

文化財保護課 課 長：立石雅文

課長補佐兼課主査：宮崎俊一 古賀正美 園井正隆

課 主 査：白木 守 事務主査：近澤康治

庶務担当：豊福早苗

調査担当：神保公久 整理担当：米澤美詠子・古賀和子

発掘調査臨時職員

執行弘子・高尾春代・田中樹子・永富敏明・橘原節子・橘原初美・藤木幸子・丸山 幸
迎 直樹・由布幸子・渡辺しげ子・渡辺やつ子

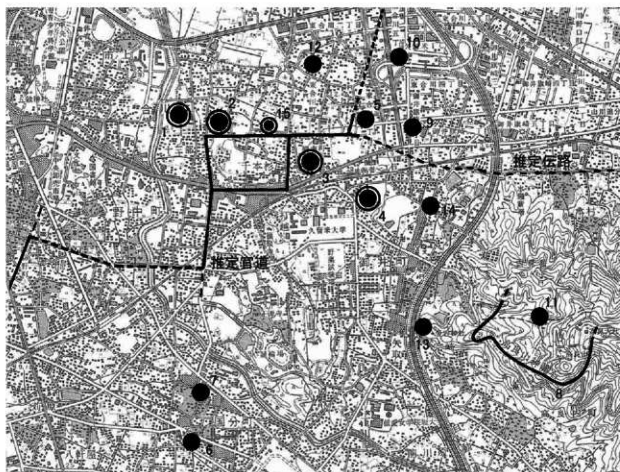
発掘調査整理臨時職員

古賀啓子・森山優子

Ⅱ．筑後国府跡の立地と概要

1. 地理的環境

筑後国府跡の位置する久留米市は、九州最大の穀倉地帯である筑後平野の中央に位置し、交通の要衝として発展してきた。筑後平野の南側には耳納山地が連なり、その西端には延喜式内社である高良大社が鎮座する高良山（312.3m）が聳える。ここから北西に派生する低位段丘上に筑後国府跡は立地し、東西1.0km、南北0.7km程度の範囲に展開している。現在の久留米市街地の東方約1.6km付近である。筑後平野には阿蘇外輪山に源を発した筑後川が西流し、有明海に注ぐ。筑後国府跡の北側には九州一の大河筑後川が流れ、国府の選地にあたっては筑後川の水運と地理的立地の利便性に起因しているものと考えられる。国府の立地する台地南端には、水縄断層系千本杉断層が東西に伸びており、この断層によって形成された断層崖下には湧水がいくつも見られる。これらの湧水は谷を開析し、台地を分割している。さらに国府の西側は高良山南麓に源を発した高良川が、東側には中谷川が流れ、北の筑後川、南の断層崖とともに国府城の四至を画している。



第1図 筑後国府跡の位置と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

1. 筑後Ⅰ期政庁 2. 筑後Ⅱ期政庁 3. 筑後Ⅲ期政庁 4. 筑後Ⅳ期政庁 5. ヘボノ木遺跡
6. 筑後国分僧寺跡 7. 筑後国分尼寺跡 8. 高良山神龍石 9. 神道遺跡 10. 下見遺跡
11. 高隆寺跡 12. 西小路遺跡 13. 祇園山古墳 14. 二本木遺跡 15. 第243次調査地

2. 筑後国府の概要

東アジアの社会情勢が不安定だった7世紀中頃、枝光台地西部の古宮・田代地区を中心に、大溝や土塁を伴う掘立柱建物群が営まれた（前身官衙）。この古宮地区には、筑後国が成立した7世紀末から8世紀中頃にかけて、築地塙で囲繞された掘立柱建物群などからなる政庁的な官衙が営まれている（Ⅰ期政庁）。その後、九州において律令体制が安定した8世紀中頃には、古宮地区から東へ約200mの阿弥陀地区に築地塙で囲繞され、9世紀前半には礎石建物が造営される南北75m、東西67.5mの政庁が営まれた（Ⅱ期政庁）。このⅡ期政庁内部は不明瞭な点が多いが、西脇殿や政庁南前面の朝集殿的な建物群、政庁を囲繞する築地塙、大量の古瓦などが検出されている。この時期、政庁に付属する官衙群は枝光台地一帯に広がり、各官衙はそれぞれの単位毎に計画方位をもって造営される。特にⅡ期政庁の南東約200mには、浅い谷を挟んで国司館跡も確認されている。Ⅱ期政庁は10世紀前半に火災により焼失したと思われ、東へ約600mの朝妻地区に再び移転した。このⅢ期政庁は、幅約4mの大溝で区画された1辺約140mの区画を有し、内部では大規模な掘立柱建物群が検出されている。付属官衙群も併せて移動したと考えられ、政庁の東側に多数の官衙群が確認されている。さらに11世紀後半には南東約400mの横道遺跡へ移転したと考えられており（Ⅳ期政庁）、『高良記』という「今ノ符」とされるこの政庁は、12世紀後半頃まで存続していたようである。

第1表 筑後国府跡の変遷

	所在地	存続年代
前身官衙	久留米市合川町枝光台地一帯（中枢部：田代地区）	7世紀中頃～7世紀末頃
Ⅰ期政庁	合川町古宮地区	7世紀末頃～8世紀中頃
Ⅱ期政庁	合川町阿弥陀地区	8世紀中頃～10世紀中頃
Ⅲ期政庁	朝妻町三丁野地区	10世紀中頃～11世紀後半
Ⅳ期政庁	御井町横道地区	11世紀後半～12世紀後半



第2図 筑後国府跡第243次調査区全景（東上空より）

Ⅲ. 調査の記録

1. 調査の目的と経過

調査地は、筑後国府跡Ⅱ期政庁に付随する国司館跡の北東側に位置する。前述したように周囲においては、第173・197・198・212・218次調査が実施されている。これらの調査では、8～15世紀代を中心に多くの遺構・遺物が検出されている。特に東側隣接地で実施された第212次調査地では、筑後国府域を東西方向に計画的に敷設された官道が約72mにわたって確認されており、その延長部が対象地の南部分で検出されることが予想された。また、第218次調査では9世紀代の四面底建物をはじめとする掘立柱建物群、道路遺構、竪穴建物などが検出され、第197次調査では中世の通称「立土土塁」の測量調査などが実施されており、遺構の密集度は非常に高いことが窺われる。今回はこれらの成果を念頭に置き、各時代の遺構群の広がりを確認することを目的とした。

現地調査は、平成23年5月24日に重機による表土剥ぎから開始した。表土を除去した部分から、作業員により遺構検出を実施し、平板測量による略図作成、終了した箇所より遺構掘り下げを開始した。遺構実測、写真撮影を並行して行い、全ての掘り下げ終了後に全体写真を撮影した。補足調査終了後に埋め戻しを行い、平成23年8月1日に全ての現地作業を終了した。個別遺構・土層断面図（S=1/10）は手測りで作製したが、それ以外の遺構実測はトータルステーションを用い、その記録は株式会社CUBIC製ソフト「遺構くんCubic」で編集・保管している。遺構の記録写真は、全体写真以外を神保がカラーリバーサル・モノクローム6×7判で撮影した。

2. 検出遺構

本調査地の周辺地形は、南東から北西側へ傾斜している。対象地は畑地・水田として利用されてきたため、遺構の削平や攪乱が随所に確認できた。基本土層は、旧耕作土が0.2～0.3m、黒色の遺物包含層が約0.1～0.2mであるが、南側の標高が高い部分にかけて残存状況が悪く、遺物包含層は確認できなかった。遺構検出面である地山面までの深さは、調査北西側で約0.8m程度、南側では約0.4m程度と傾斜により比高差が認められる。検出面の標高は北西側で約12.3mである。

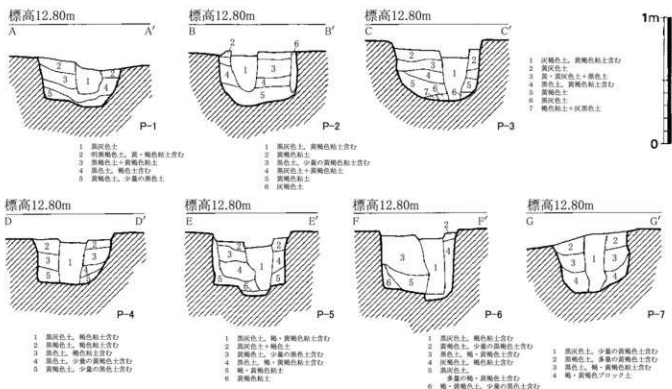
検出遺構は、掘立柱建物4棟、溝9条、土坑7基、道路遺構1条、地鎮遺構1基、ピットなどである。掘立柱建物は調査区の北側に集中して検出される傾向が窺え、道路遺構は想定どおり調査区南部分で検出された。ここでは、これらの主要遺構について報告する。

掘立柱建物

SB1（第5～11図）

調査区の北壁沿いで検出した。南側柱列が検出できており、東西棟建物と思われる。北～北東側が調査区外に延びるために全容は不明であるが、桁行5間（11.4m～南側柱列で西から2.6m+2.2m+2.3m+2.1m+2.2m）×梁間1間（西側柱列で2.2m）以上を測る。柱穴の平面形は、隅丸方形を呈し、1辺は0.6～0.7m、柱穴の底面レベルは標高12.1～12.2mでほぼ一致している。柱痕は径0.2m程度であり、最終的な抜き取りや柱替え、建替えなどは行われていない。埋土は互層状に突き固めているものではなく、黒色系の砂質土に黄色粘質土が混入するものが多い。各柱穴の掘方埋





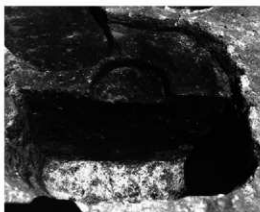
第5図 SB1 柱穴断面図 (1/30)



第6図 SB1 P-2土層断面 (南東から)



第7図 SB1 P-3土層断面 (南から)



第8図 SB1 P-4土層断面 (南から)

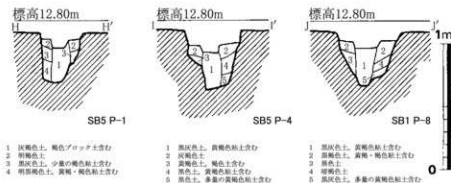


第9図 SB1 P-6土層断面 (南から)

土からは、土師器・甕の細片、須恵器・皿の細片などが出土している。建物の計画方位はN-9°-Eである。また、SB1の前面約2.1mには、SB1の南東角柱前から西方向へ東西3間分（柱間約2.0m）の柱穴が確認できた。SB1に伴う目隠し塀、もしくは庇などSB1を構成する一部分の可能性が考えられる。しかし、SB1の南側柱列5間分を覆ってしまうものではなく、3間ではないため、SB1の出入り口付近に設けられたものであるのかなど、構造上不明な点も多い。

SB5（第10図）

調査区北部分で検出した。前述したSB1と重複して検出されたが、柱穴の重複は無いために直接に新古を確認することはできなかった。遺構の北側と南側は調査区外へ広がる

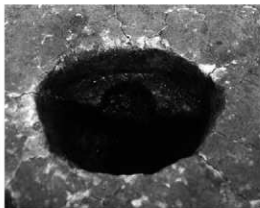


第10図 SB1・5柱穴断面図（1/30）

が、後述するSB11同様に側柱が等間隔に並び、柱穴の埋土も類似することから掘立柱建物と判断した。桁行2間以上（ $4.8\text{m} + \alpha$ ）×梁間2間程度（3.6m）を測る。柱穴は円形・楕円形を呈し、径約0.3～0.4m、深さ約0.4～0.5mを測る。柱痕は径0.2m程度であり、埋土は灰黒色系の砂質土で、白・黄色粘土が混入していた。柱穴の重複関係からSB1・11に後出する。土師器・皿・埴・甕の細片、黒色土器A類細片などが出土している。建物の計画方位はN-3°-Eである。

SB10（第12図）

調査区北部分、SB1の東側約3.6m付近で検出した。隅丸方形の柱穴2間分を検出したのみであるが、SB1の南側柱列と柱筋が一致し、柱間が1.8mで一致するために梁間2間の南北棟掘立柱建物と判断した。桁行規模は北側が調査区外へ広がるために不明である。柱穴は1辺約0.5～0.7m、深さ約0.4～0.5mを測り、柱痕は径0.2m程度である。埋土からは土師器・皿・甕の細片、須恵器・皿の細片などが出土している。建物の計画方位はN-9°-Eである。



第11図 SB1 P-8土層断面（西から）



第12図 SB10 P-1土層断面（南から）

SB11

調査区北部分、前述したSB5と重複して検出された。SB5と同様に遺構の北側と南側部分は調査区外に広がるため、詳細は不明であるが、柱穴が等間隔に並び、柱穴の埋土も類似することから掘立柱建物と判断した。桁行1間以上(2.7m+α)×梁間2間程度(3.6m)を測る。柱穴は円形・楕円形を呈し、径約0.3~0.4m、深さ約0.4mを測る。柱痕は径0.2m程度であり、埋土からは土師器坏・埴・甕の細片、須恵器蓋・坏の細片などが出土している。建物の計画方位はN-3°-Eである。重複関係からSB5に先行する。柱穴形状や建物方位などから、SB11の建替えに伴いSB5が造営されたものと思われる。

溝

SD15 (第13図)

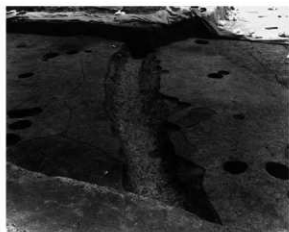
調査区の北壁沿いで検出した東西走行の溝である。東西方向に約16m走行し、西端は北側へ折れるようである。中央付近は後述するSK25と重複し、SD15が先行する。上面幅約0.6m、底面幅約0.4mを測る。断面形状は逆台形を呈し、深さは0.15m程度であり、底面レベルは東側から西側に向かって低くなる。埋土からは、土師器坏・皿・埴・高坏・甕・土鍋の細片、須恵器蓋・坏・高坏・甕の細片、黒色土器A・B類細片、龍泉窯系青磁細片、白磁細片、古瓦細片(縄目・斜格子)などの遺物が出土している。



第13図 SD15・SK25全景(西から)

SD35 (第14図)

調査区の北部分、前述したSD15の西側で検出した南北走行の溝である。調査区幅の約6.5m分を検出したが、後述するSD65と埋土や帰属年代が類似することから、その北側延長部である可能性も考えられる。上面幅約0.6m、底面幅約0.4mを測り、底面はフラットで断面逆台形を呈する。深さは0.35m程度であり、底面レベルは南側から北側に向かって低くなる。埋土からは、土師器坏・皿・埴・甕・土鍋の細片、須恵器蓋・坏・皿・高坏・甕の細片、黒色土器A・B類細片、龍泉窯系青磁細片、白磁細片、古瓦細片(縄目)、久留米藩の藩窯として操業された朝妻焼(18世紀前半)を含む近世陶磁器などの遺物が出土している。



第14図 SD35全景(北から)

調査区の北壁から中央付近にかけて検出し、溝である。直線的には掘削されておらず、やや歪曲して検出されたが、北壁から南へ約10m付近から緩やかに曲がり始め、カーブを繰り返して調査区西壁に至る。重複関係より後述するSK90・130・135に後出する。上面幅は約0.1~0.2m、底面幅約0.6~1.5m以上を測り、底面はフラットで断面逆台形を呈する。



第16図 SD45全景（北から）



第17図 S D45南部分全景（西から）

深さは0.3～0.9mと法量にバラつきが認められるが、これは調査区コーナー付近で土坑状に深くなる箇所があり、上・下端幅や深さに乱れが生じているためである。この部分は土坑の重複が想定されたが、埋土による切り合いは確認できなかったため、同一遺構と判断して掘下げを行った。底面レベルは西から東、南から北へ向かって低くなるが、前述した土坑状に深くなる部分では深さ約0.9mと最も深くなる。埋土は褐色系の砂質土で、西方向からの流入が認められた。土師器杯・皿・碗・甕・土鍋・羽釜・すり鉢の細片、須恵器蓋・杯・高杯・皿・壺・甕・円面硯の脚部・こね鉢の細片、黒色土器A・B類細片、瓦器碗細片、瓦質土器火舎の細片、中世陶器の細片、龍泉窯系青磁細片、白磁細片、古瓦細片、石臼細片、砥石、鉄滓、釘などの多様な遺物が出土している。



調査区の北部分、前述したS D35の東側で

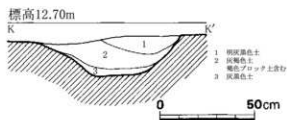


第18図 S D49全景(北から)

検出した南北溝である。調査区幅の約6.5m分を検出した。上面幅約0.45～0.6m、底面幅約0.3mを測る。断面形状は逆台形を呈し、深さは0.2m程度である。黒色砂質土の埋土からは、土師器杯・甕の細片、須恵器蓋・杯・甕の細片などの遺物が出土している。

SD65 (第19・20図)

調査区の中央部分、東壁沿いで検出した南北溝である。前述したように、SD35の南側延長部にあたることから、同一の溝の可能性も考えられる。約16.0m分を検出したが、南部分は耕作による攪乱のため不明である。上面幅約0.7m、底面幅約0.3mを測り、底面は丸みを帯び、断面逆台形を呈する。深さは0.2m程度であり、底面レベルは南側から北側に向かって低くなっている。埋土からは、土師器杯・皿・碗・甕・土鍋の細片、須恵器壺・甕の細片、黒色土器B類の細片、瓦器碗の細片、白磁細片、古瓦細片(斜格子)、近世陶磁器、凝灰岩の細片などの遺物が出土している。



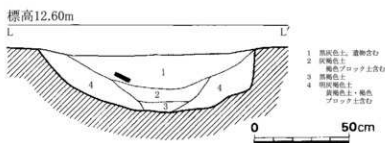
第19図 SD65土層断面図 (1/20)



第20図 SD65全景 (南から)

SD70 (第21～23図)

調査区の中央部において、西壁から東壁にかけて検出した溝である。西壁中央付近では東方向へ掘削されており、調査区内で南へ折れ、約9.0m南へ延びた後に再び東へ折れ東壁に至る。前述したSD65に先行する。上端幅は最大幅



第21図 SD70土層断面図 (1/20)

約2.0mを測るが、南部分にかけて狭くなり、東西走行する部分では約0.2mと極めて狭くなっている。深さも一定ではなく、北東側のコーナー部分では土坑状を呈し、深さ約0.7mを測るが、東西走行する部分では約0.2mと浅い。埋土は褐色系の砂質土で、土師器杯・高杯・皿・碗・甕・土鍋・羽釜の細片、須恵器杯・壺・甕の細片、黒色土器A・B類細片、瓦器碗の細片、龍泉窯系青磁細片、同安窯系青磁細片、白磁細片、中世陶器甕の胴部片、古瓦細片(縄目・斜格子・無文)、天草砂岩製の砥石片、刀子の切先片、鉄滓などの多くの遺物が出土している。特に被熱した礫や煤が付着した礫、大量の土鍋が出土していることが特筆される。



第22図 SD70遺物出土状況（西から）



第23図 SD70全景（北から）

SD145（第24・25図）

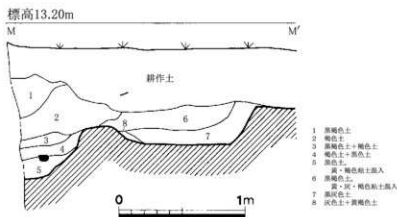
調査区の南壁沿いで検出した東西溝である。後述するSD150と重複関係にあるが、SD145が後出する。東西長約3.5m分を検出した。深さ約0.5mを測るが、上端・底部幅などの詳細は遺構が調査区南側へ広がるために不明である。埋土は黒褐色系の砂質土で、土師器・甕・甕の細片、須恵器甕の細片、黒色土器B類細片、瓦質土器鉢の細片、古瓦細片（縄目・無文）などが出土している。位置関係などから第212次調査検出のSD4の西側延長部である可能性が考えられる。



第24図 SD145・150全景（東から）

SD150（第24・25図）

前述したSD145と重複して検出した東西溝である。後述するSF3980の北側溝と想定される。上端幅はSD145と重複するために不明であるが、約1.2mを測るものと思われる。底面はフラットで幅約0.7m、深さは0.3mを測る。埋土は黒色系の砂質土で、黄色粘土や灰色ブロック土が混入していること



第25図 SD145・150土層断面図（1/30）

から、人為的な埋め戻しが想定される。埋土からは土師器杯・埴・甕の細片、須恵器甕の細片、黒色土器A・B類細片、越州窯系青磁碗底部片、古瓦細片（縄目・斜格子・無文）、天草砂岩製の砥石片、被熱した花崗岩などの礫が出土している。

土坑

SK25（第13図）

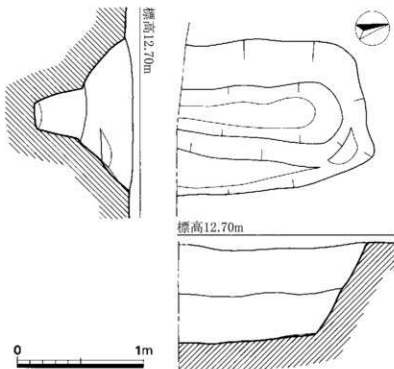
調査区の北壁沿いで検出した大型の土坑である。前述したSD15と重複するが、SK25が後出する。遺構の大半は調査区外に広がるものと思われ、プランや規模は不明である。検出した部分では、東西長約8.0m、南北は0.6mを測る。底部は凹凸が認められ、最深部で約0.4mを測る。埋土は黒褐色系の砂質土で、土師器蓋・杯・皿・埴・甕・土鍋の細片、須恵器杯・高杯・甕の細片、黒色土器A類細片、白磁碗の細片、古瓦細片、黒曜石の剥片などが出土している。

SK30

調査区の北東部に検出した。前述したSB10の南側に位置する。後述するSX100と重複するが、SK30が後出する。遺構の平面形は東西に主軸を取る楕円形を呈し、東西長約2.3m、南北長約1.3mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれており、底部は平坦で深さ約0.35mを測る。埋土は黒色砂質土で、ほぼ単一の埋土であった。土師器蓋・杯・皿・埴・甕・土鍋の細片、須恵器蓋・杯・鉢・甕の細片、黒色土器A類細片、龍泉窯系青磁細片、ふいご羽口細片、鉄滓など多様な遺物が出土している。

SK40（第26・27図）

調査区が東方向へ折れる部分の南壁沿いで検出した。前述したSD35とSD49の中間に位置する。遺構の南側が調査区外へ広がる為に詳細は不明であるが、検出した部分では平面形は南北長約1.5m、東西長約1.2mの長方形を呈する。深さ約0.7mを測るが、検出面から斜めに掘り込まれ、約0.35m付近からは角度を変え、ほぼ垂直に約0.35m掘り込む。底面付近は溝状を呈する。遺構の性格は不明であるが、埋土に黄色粘土やブロック土が多く認められたため、最終的には人為的に埋め戻されたものと思われる。土師器杯・皿・埴・鉢・甕・土鍋・羽釜の細



第26図 SK40実測図（1/30）

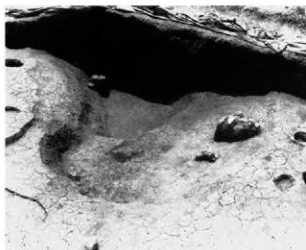
片、須恵器坏・壺・甕の細片、黒色土器A類細片、中世陶器細片、砂岩製の砥石などが出土している。

SK50 (第28・29図)

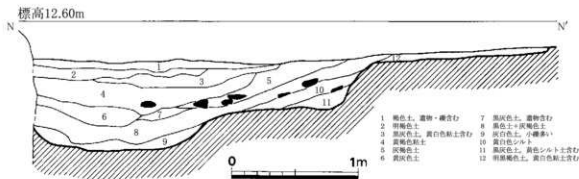
調査区の北西部、西壁沿いで検出した。遺構の西側は調査区外に広がるため、平面形などの詳細は不明である。検出した部分では東西長約5.3m、南北長約5.0mを測り、平面形は不整形である。底面は南西側に向かって徐々に深くなり、南西部の底面形はほぼフラットな楕円形を呈する。最深部で約1.5mと深い。埋土は黒褐色系の砂質土で、黄・灰色土の砂質土、黄白色シルト質土を含んでいた。大量の遺物が出土しており、中でも煤が付着した礫や被熱した礫などが多く出土している。しかし、焼土や遺構の壁や底部に被熱面などは確認できなかったことから、SK50内部で使われたものではなく、他所で使用されたものがSK50に廃棄されたものと思われる。他には土師器蓋・坏・高坏・皿・埴・托・壺・すり鉢・甕・土鍋・羽釜の細片、須恵器坏・壺・甕の細片、黒色土器A・B類細片、瓦質土器の火舎細片、中世陶器大甕の細片、越州窯系・龍泉窯系・同安窯系青磁細片、白磁碗の細片、古瓦（網目・無文・斜格子）細片、ふいご羽口細片、土鍾、鉄滓、石鍋細片、砥石、石白片など多様な遺物が出土している。



第27図 SK40全景（北から）



第28図 SK50全景（東から）



第29図 SK50土層断面図 (1/30)

SK55 (第30・31図)

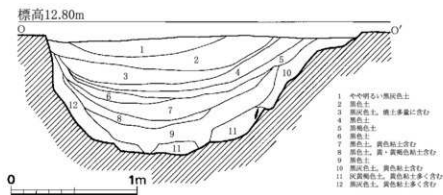
調査区の北部分の中央付近で検出した。前述したSB1の南側、SB5・11の西側にSB1の目隠し堀か南底と思われる柱穴と重複しているが、SK55が先行する。平面形は東西に主軸を取る楕円形を呈し、東西長約4.8m、南北長約2.4mを測る。断面形状はすり鉢状を呈し、深さ約1.0mを測る。埋土は黒色砂質土でほぼ単一の埋土であったが、検出面より-0.3~0.4m部分には焼土を大量に含む層が確認された。土師器蓋・坏・皿・壺・甕・瓶の細片、須恵器蓋(転用硯含む)・坏・高坏・甕の細片、黒色土器A類細片、製塩土器の細片、ふいご羽口細片、鉄滓などが出土している。

SK90 (第32・33図)

調査区の北壁沿いで検出した。前述したSD45に先行する。北側が調査区外に広がるため、平面形などの詳細は不明である。検出した部分では東西長約5.0m、南北長約2.8mを測り、平面形は円形を呈するものと思われる。断面形状は中央付近に向かって徐々に深くなり、最深部で約0.7mを測る。埋土は褐色系の砂質土で、黄褐色土や褐色土のブロックを含んでいた。土師器坏・壺・鉢・甕・移動式カマド・土鍋・羽釜の細片、須恵器蓋・坏・高坏・すり鉢・甕の細片、黒色土器A類細片、中世陶器大甕の細片、龍泉窯系青磁の細片、古瓦(縄目・無文)細片、ふいご羽口細片、土鍾、鉄滓、凝灰岩片、砥石、石臼細片など多様な遺物が出土している。また、SK50と同様に、煤が付着した礫や被熱した礫が多く出土しているが、被熱面などは確認できなかった。



第30図 SK55土層堆積状況(西から)



第31図 SK55土層断面図(1/30)



第32図 SK90全景(西から)

SK130 (第34・35図)

調査区の北西部で検出
した。前述したSK50の
東側に位置し、SD45に
先行する。遺構の平面形
は東西に長い長方形を呈
し、東西長約3.0m、南
北長約1.5mを測る。ほ
ぼ垂直に掘り込まれてお

り、底部は平坦で深さ約0.65mを測る。埋土には黄色粘土が大量に含まれており、人為的な埋め戻しが行われたものと思われる。出土遺物は少なく、土師器杯・碗・甕・すり鉢・土鍋・羽釜の細片、須恵器杯・壺・甕の細片、黒色土器A・B類細片、龍泉窯系青磁碗の細片、ふいご羽口細片、古瓦細片などが少量出土したのみである。穴蔵などとして使用され、その後の土地利用を考慮して入念に埋め戻されたものと思われる。

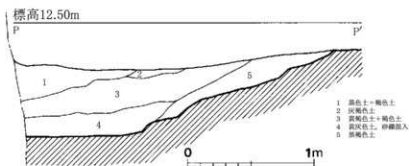


第34図 SK130全景（南から）

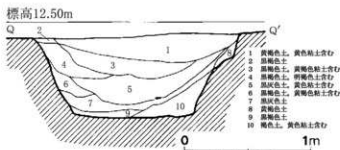
道路遺構

SF3980 (第36・37図)

調査区の南部分で検出した。筑後国府城の中央部に、東西方向に敷設されたSF3980の一部と思われる。東側で実施した第212次調査においても検出されており、走行方位は一致する。今回は、南壁から北側へ約4.3m分を検出したが、前述したSD150を北側溝とする時期と、SD150を埋め戻した後に拡幅・積土を施した2時期の存在が想定される。これは、周辺の調査成果からも明らかにされているが、今回は耕作による攪乱が著しく、遺構の残存状況が極めて悪いため、明瞭には確認できなかった。道路遺構の痕跡としては、地山面で確認された波板状痕跡とその上面の積土である。波板状痕跡は4箇所確認され、長軸長0.7～1.4m、短軸長約0.3m程度を測る。内部には小礫や遺物の細片、砂質土を突き固めており、底面は硬化していた。この波板状痕跡の一部がSD150の埋土上面でも認められたため、SD150埋没後にSF3980が改修されたことが確認できている。この波板状痕跡の覆土は黒色土であるが、褐色土が多く認められる部分があり、人為的な積土であ



第33図 SK90土層断面図 (1/30)



第35図 SK130土層断面図 (1/30)



第36図 SF3980全景（西から）



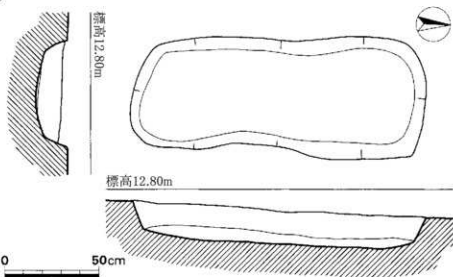
第37図 波板状痕跡全景（北から）

ることが看取される。路面は削平されたものと考えられる。なお、SF3980の路面幅は、周辺で実施された第217次調査によると、側溝を伴う時期（Ⅰ期）が約6.6m、側溝埋没後の拡幅された時期（Ⅱ期）が約11.0mとされる（久文報第269集）。今回は遺構の南側が調査区外に広がることから、路面幅を確認することはできなかった。

土壌墓

ST20（第38・39図）

調査区北部分の中央部で検出した。南北に主軸を持つ土壌墓と思われる。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺長約1.55m、短辺長約0.55mを測る。深さ約0.2mを測るが、底面は北側に向かって若干傾斜している。頭位は



第38図 ST20実測図（1/20）

北側と思われるが確証はない。埋土はしまりのない黒色砂質土で、単一であった。副葬遺物などは出土しておらず、土師器杯・壺・甕の細片、須恵器杯の細片が少量出土したのみである。

地鎮遺構

SX100（第40・41図）

調査区の北東部、前述したSK30と重複して検出した。SX100が先行する。平面形はほぼ円形を



第39図 S T20全景 (南から)



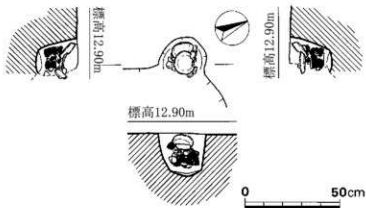
第40図 S X100全景 (東から)

呈するものと思われるが、直径約0.25mを測る。深さは約0.23mを測り、上位には土師器坏が2点据えられており、その下位には円礫が25点出土している。この円礫には赤色顔料が全面に塗布されていることから、通常のピットとは異なる性格が想定される。前述したS B10の南側柱列の南側約2.0mに位置することを考慮すると、S B10造営に関わる地鎮遺構の可能性が考えられる。

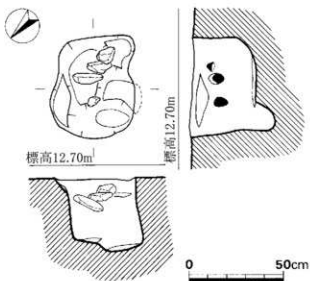
ピット

SP43 (第42・44図)

調査区の北部分、前述したS T20の北側付近で検出した。平面形は長辺長約0.55m、短辺長約0.4mの長方形を呈し、深さは最深部で約0.4mを測る。遺構の上位～中位にかけては礫が集中して検出された。これらの礫の南西側が深く掘り込まれていることから、柱などの根固めに使用された可能性も考えられる。埋土からは、土師器坏・甕の細片、須恵器坏の細片、黒色土器A類の細片などが出土している。



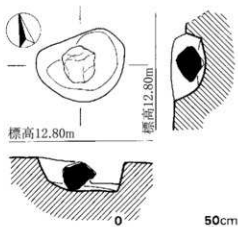
第41図 S X100実測図 (1/20)



第42図 SP43実測図 (1/20)

SP92 (第43・45図)

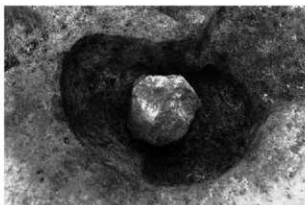
調査区の北東部分、前述したSB5・11付近で検出した。平面形は長軸長約0.5m、短軸長約0.35mの楕円形を呈し、深さは約0.15mを測る。遺構の中央部に大型の礫が据えられた状態で検出された。根石などに使用された可能性が考えられる。埋土からの出土遺物は皆無であった。



第43図 SP92実測図 (1/20)



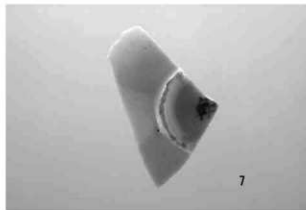
第44図 SP43全景 (南西から)



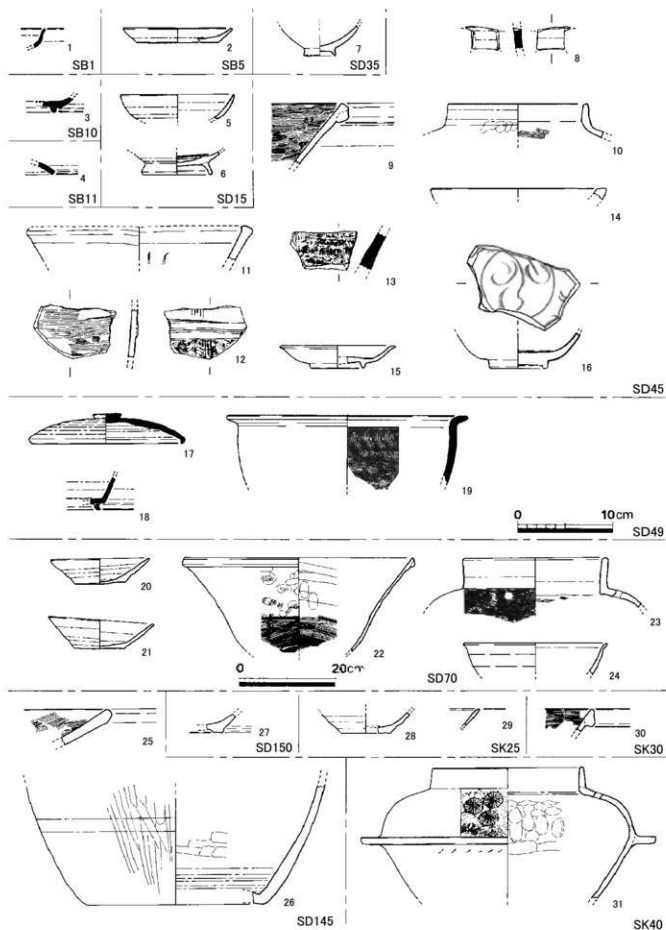
第45図 SP92全景 (南から)

3. 出土遺物

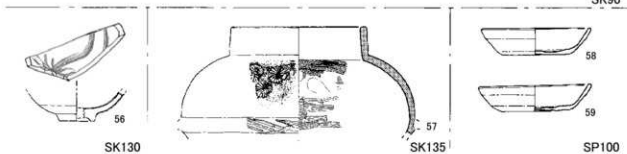
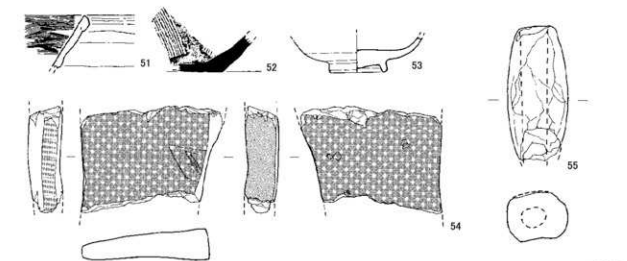
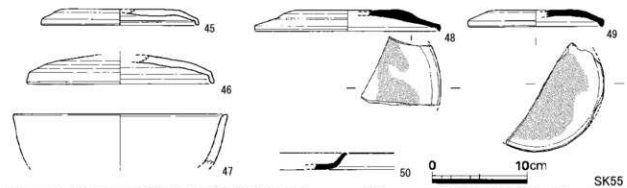
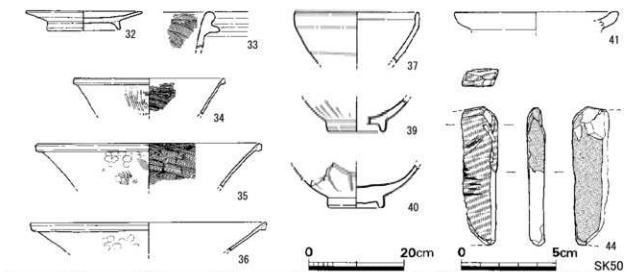
今回の調査では多くの遺構を検出することができたため、各遺構に伴って多量の遺物が出土している。特に中世に位置付けられる溝や土坑からの出土量が多く、総量はパンコンテナーに10箱程度である。出土遺物は土師器、須恵器を中心に、黒色土器、瓦質土器、中世陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、古瓦、土製品、石製品、鉄製品など多種類に及ぶ。紙面の都合上、個々の遺物について説明は加えないため、詳細は第2・3表の出土遺物観察表を参照されたい。



第46図 出土遺物 (写真①)



第47図 出土遺物実測図① (1/4、22は1/8)



第48図 出土遺物実測図② (1/2・1/4・1/8)

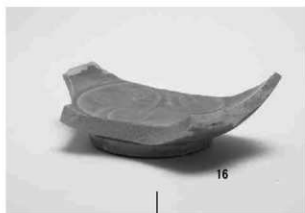
第2表 出土遺物観察表①

遺物 No	出土遺物	種 別	器 形	法 差 (cm)		色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番 号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面		
1 第47区	S B 1	煎煮器	皿	—	—	(2.1)	灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ精良	20103 000001
2 第47区	S B 5	土師器	皿	(11.5)	(8.6)	1.6	にぶい・黄 にぶい・黄	にぶい・黄 にぶい・黄	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	多量の赤色粒 子含む	20103 000002
3 第47区	S B 10	煎煮器	坪	—	—	(1.7)	灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ精良	20103 000003
4 第47区	S B 11	煎煮器	蓋	—	—	(1.4)	灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ精良	20103 000004
5 第47区	S D 15	土師器	坪	(12.0)	—	(2.7)	黄	黄	回転ナデ	回転ナデ	障石含む	20103 000006
6 第47区	S D 15	土師器	碗	—	(7.4)	(2.5)	にぶい・黄	にぶい・黄	回転ナデ ヘラ切り	ミダキ	赤色粒子含む	20103 000005
7 第47-49区	S D 45	煎煮器	内面観	—	(5.2)	(2.2)	軸・透明	胎土・白	施釉	施釉	ほぼ精良	20103 000010
8 第47区	S D 45	煎煮器	内面観	—	—	(2.3)	灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	精良	20103 000017
9 第47区	S D 45	土師器	土鍋	—	—	(6.4)	黄・にぶい・黄	にぶい・黄	回転ナデ ナデ	刷毛目	本底 (赤黄・ 赤黄) 含む	20103 000023
10 第47区	S D 45	土師器	羽蓋	(14.7)	—	(3.4)	にぶい・黄	にぶい・黄	回転ナデ 押さえ	回転ナデ 刷毛目	多量の赤色粒 子含む	20103 000013
11 第47区	S D 45	土師器	すり鉢	(24.0)	—	(3.7)	黄・にぶい・黄	にぶい・黄	ナデ	回転ナデ 刷毛目	少量の赤土 (赤黄・黄・黄)	20103 000020
12 第47区	S D 45	土師器	大甕	—	—	(4.8)	にぶい・黄	にぶい・黄	刷毛目	刷毛目	少量の赤土 (赤黄・黄・黄)	20103 000016
13 第47区	S D 45	煎煮器	すり鉢	—	—	(4.0)	灰	灰	回転ナデ	回転ナデ 刷毛目	少量の赤土 (赤黄・黄・黄)	20103 000015
14 第47区	S D 45	石製品	石臼	(37.3)	—	(2.5)	灰黄褐色	灰黄褐色	—	—	凝灰岩	20103 000019
15 第47区	S D 45	白磁	皿	(12.2)	—	(5.7)	2.4 灰白	灰白	施釉	施釉 表面は施釉	精良	20103 000025
16 第47-49区	S D 45	青磁	碗	—	6.2	(3.9)	オリブ	オリブ	施釉	施釉 表面は施釉	精良	20103 000018
17 第47-49区	S D 49	煎煮器	蓋	(16.6)	—	3.2	灰	灰	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ	少量の赤土 (赤黄・黄・黄)	20103 000026
18 第47区	S D 49	煎煮器	坪	—	—	(3.5)	灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ精良	20103 000027
19 第47-49区	S D 49	煎煮器	甕	(51.2)	—	(14.7)	灰 青灰	灰 青灰	叩き 回転ナデ	叩き 回転ナデ	微砂粒	20103 000028
20 第47-49区	S D 70	土師器	坪	10.5	5.5	2.7	にぶい・黄 灰褐色	にぶい・黄 灰褐色	回転ナデ 赤切り	回転ナデ	精良	20103 000049
21 第47-50区	S D 70	土師器	坪	11.2	5.4	2.6	にぶい・黄 灰褐色	にぶい・黄 灰褐色	回転ナデ 赤切り	回転ナデ	精良	20103 000050
22 第47区	S D 70	土師器	土鍋	(49.0)	—	(20.0)	暗黄 黒褐色	黄・黒褐色	ナデ 刷毛目	ナデ 刷毛目	微砂粒・障石・ 赤土・黄・黄・黄	20103 000051
23 第47区	S D 70	土師器	羽蓋	(15.4)	—	(5.3)	にぶい・黄 灰褐色	にぶい・黄 灰褐色	回転ナデ 菊花文	回転ナデ 刷毛目	微砂粒・障石・ 赤土・黄・黄・黄	20103 000053
24 第47区	S D 70	白磁	碗	(15.2)	—	(3.4)	灰白	灰白	施釉	施釉	微砂粒	20103 000054
25 第47区	S D 145	土師器	鉢	—	—	(3.8)	灰白 灰黄	灰白 灰黄	回転ナデ	刷毛目	石粒 (石黄・黄・ 赤土・黄・黄・黄)	20103 000068
26 第47区	S D 145	土師器	鉢	—	(18.8)	(12.7)	にぶい・黄	にぶい・黄	ナデ ケズリ	ナデ ケズリ	石粒 (石黄・黄・ 赤土・黄・黄・黄)	20103 000069
27 第47-50区	S D 150	青磁	碗	—	—	(2.1)	灰オリブ	灰オリブ	施釉	施釉	精良	20103 000070
28 第47区	S K 25	土師器	坪	—	(5.2)	(2.5)	にぶい・黄	にぶい・黄	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ精良	20103 000068
29 第47区	S K 25	白磁	碗	—	—	(1.8)	灰白	灰白	施釉	施釉 口縁部は施釉	ほぼ精良	20103 000067
30 第47区	S K 30	土師器	土鍋	—	—	(2.5)	黄 灰褐色	黄 灰褐色	回転ナデ	刷毛目	ほぼ精良	20103 000069
31 第47区	S K 40	土師器	羽蓋	(16.0)	—	(13.8)	黄 明赤褐色	にぶい・黄	回転ナデ 菊花文	押さえ 回転ナデ	微砂粒 (赤黄・黄・ 赤土) 含む	20103 000011
32 第48-50区	S K 50	土師器	托	12.3	7.8	(2.4)	黄	黄	回転ナデ ヘラ切り	ナデ 回転ナデ	微砂粒 (赤黄・赤 土・黄) 含む	20103 000038
33 第48区	S K 50	土師器	土鍋	—	—	(3.9)	黄 黒褐色	黄 黒褐色	ナデ	刷毛目	微砂粒 (赤黄・ 赤土) 含む	20103 000033
34 第48-50区	S K 50	土師器	土鍋	(32.4)	—	(7.7)	黄 黒褐色	黄 黒褐色	ナデ 刷毛目	刷毛目	微砂粒 (赤黄・ 赤土) 含む	20103 000039
35 第48区	S K 50	土師器	土鍋	(48.0)	—	(9.4)	黄 黒褐色	黄 黒褐色	ナデ 押さえ 刷毛目	刷毛目	微砂粒 (赤黄・赤 土・黄・黄) 含む	20103 000037
36 第48区	S K 50	土師器	土鍋	(50.4)	—	(8.2)	黄	黄	ナデ	刷毛目	微砂粒 (赤黄・赤 土・黄) 含む	20103 000029
37 第48-50区	S K 50	陶器	天日焼	(13.2)	—	(5.5)	黒褐色	黒褐色	施釉	施釉	微砂粒含む	20103 000042
38 第50区	S K 50	陶器	甕	—	—	(12.0)	暗オリブ	オリブ黄	叩き 施釉	叩き 施釉	微砂粒含む	20103 000034
39 第48区	S K 50	青磁	碗	—	(6.0)	(3.4)	オリブ	オリブ	施釉	施釉	精良	20103 000035
40 第48-50区	S K 50	青磁	碗	—	(6.0)	(4.3)	オリブ灰	オリブ灰	施釉	施釉	微砂粒含む	20103 000040
41 第48区	S K 50	石製品	石臼	(34.8)	—	(3.8)	にぶい・黄	黄	—	—	凝灰岩	20103 000031
42 第51区	S K 50	石製品	石臼	(34.2)	—	(9.6)	白灰 灰	—	—	—	凝灰岩	20103 000036
43 第51区	S K 50	石製品	石臼	(28.0)	—	(6.6)	白灰 灰	—	—	—	凝灰岩	20103 000041

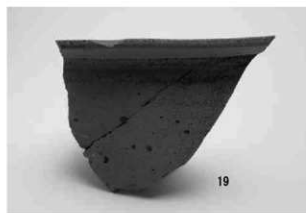
※輸入陶磁器の分類は、太宰府市教育委員会2000『太宰府桑坊X V - 陶磁器分類編 -』太宰府市の文化財第49集による。

第3表 出土遺物観察表②

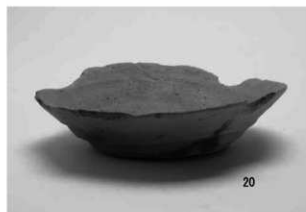
遺物 No	出土遺情	種 別	器形	法 量 (cm)			色 調		調 整		胎 土	備 考	登録番 号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
44 第48区	S K50	石製品	砥石	7.4	(1.9)	0.9	灰 増灰	灰 増灰	—	—			201103 000030
45 第48区	S K55	土師器	蓋	(16.8)	—	(1.7)	燈	燈	回転ハタケズリ 回転ナデ	回転ナデ ナデ	黄砂粒 (石灰・ 灰石・黒石・ 赤色砂) 含む		201103 000045
46 第48区	S K55	土師器	蓋	(20.0)	—	(3.0)	燈	燈	回転ハタケズリ 回転ナデ	回転ナデ ナデ	黄砂粒 (石灰・ 黒石・黄砂) 含む		201103 000046
47 第48区	S K55	土師器	碗	(22.6)	—	(5.5)	にぶい燈 燈灰	燈 灰黄	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ	黄砂粒 (黄砂) 含む		201103 000048
48 第48-51区	S K55	須恵器	蓋	(19.8)	—	(2.2)	灰白 灰オリーブ	灰黄	回転ハタケズリ 回転ナデ	回転ナデ ナデ	黄砂 (黄砂・ 黄砂) 含む	転用磁	201103 000044
49 第48区	S K55	須恵器	蓋	(14.4)	—	(1.8)	灰・灰白	灰	回転ハタケズリ 回転ナデ	回転ナデ ナデ	黄砂 (石灰・ 灰石) 含む	転用磁	201103 000047
50 第48区	S K55	須恵器	皿	—	—	(1.8)	灰	増灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	砂粒 (黄砂・ 石炭) 含む		201103 000043
51 第48区	S K90	土師器	土鍋	—	—	(5.7)	にぶい燈 燈	にぶい燈	ナデ	刷毛目	黄砂 (黄砂・石 炭・黄砂) 含む		201103 000058
52 第48-51区	S K90	須恵器	すり鉢	—	—	(3.1)	灰黄 黄灰	黄灰	回転ナデ 刷目	ナデ	砂粒 (石灰・ 石炭) 含む		201103 000055
53 第48区	S K90	青磁	碗	—	(6.1)	(3.9)	オリーブ灰	オリーブ灰	施釉	施釉 底部は露胎	ほぼ精良	龍泉窯系IV型	201103 000059
54 第48-51区	S K90	石製品	砥石	(5.7)	6.7	1.7	にぶい黄燈	にぶい黄燈	—	—	天草砂岩	4面使用	201103 000056
55 第48区	S K90	土製品	土鉢	7.2	3.2	2.3	燈 灰 にぶい黄燈	にぶい黄燈	ナデ	ナデ	精良		201103 000057
56 第48区	S K130	青磁	碗	—	(5.2)	(2.5)	灰オリーブ	灰オリーブ	施釉	施釉 底部は露胎	ほぼ精良	龍泉窯系IV型	201103 000063
57 第48区	S K135	瓦質土器	須恵	(14.4)	—	(11.5)	灰	黄灰	ナデ 黄灰文	押さ文 刷毛目	黄砂粒 (黄砂・石炭) 含む		201103 000065
58 第48-51区	S P100	土師器	坏	11.6	7.1	2.8	燈灰 にぶい燈	にぶい黄燈 にぶい黄燈	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良		201103 000061
59 第48-51区	S P100	土師器	坏	11.9	7.2	2.7	燈灰 にぶい燈 黄灰	にぶい燈 黄灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	赤色砂子含む		201103 000060



16

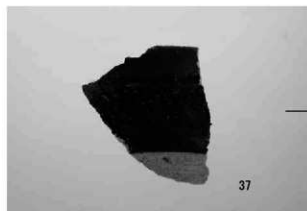
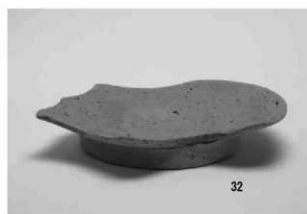
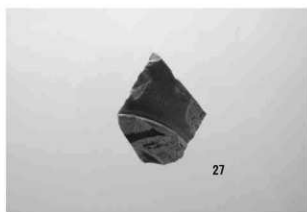


19

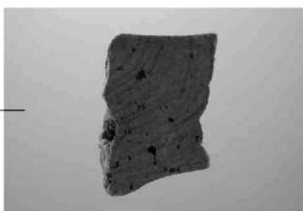
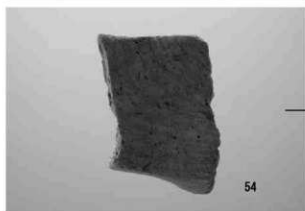
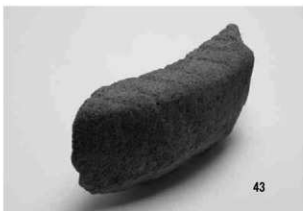


20

第49図 出土遺物 (写真②)



第50図 出土遺物（写真③）

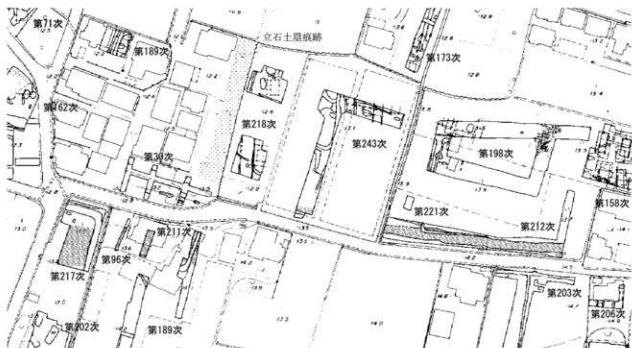


第51圖 出土遺物（写真④）

IV. まとめ

第243次調査は、宅地造成に先立つ事前の発掘調査である。今回は対象地内に敷設される道路部分を対象に、547㎡について調査を実施した。調査対象となった道路部分は、対象地内のほぼ中央に敷設されることから、対象地内に幅約6mのトレンチを設けた形となった。掘立柱建物4棟、溝9条、土坑7基、道路遺構1条、地鎮遺構1基など多くの遺構を検出することができたが、ここでは周辺の調査成果と合わせて、今回の調査で得られた所見をまとめておきたい。

今回の調査で検出された遺構群は、8世紀中頃～9世紀後半にいたる国府関連の遺構群、そして14～15世紀に属する遺構群の2時期に大別される。最も古く位置付けられる遺構は、SD49・SK55である。SD49は区画施設や排水溝、SK55は遺物の包含量が少ないことから粘土探掘坑などの性格が考えられよう。その後、東西5間の規模を有するSB1とSB10が造営されたと考えられる。SB1とSB10は南柱列と計画方位が一致しており、同一の造営計画に基づいて配置されたと見ることができる。SB1は東西棟と思われることから、曹司などの諸施設の中心的な建物と想定される。また、地鎮遺構と思われるSX100は、赤色顔料を全面に塗布した円礫をビット底部に充填し、その上面に土師器坏を2個体並べたものである。筑後国府城で地鎮遺構と考えられるものは、坏蓋などを組み合わせて安置したもの（第98次SX3995）などが知られるのみで、極めて少ない。今後の類例の増加を待ちたい。14～15世紀の遺構群は、周辺の第198・212・218次などでも溝・土坑などが検出されており、土鍋・羽釜・中世陶器など豊富な出土遺物が見られる。調査地の所在する立石地区には、中世に位置付けられ1町四方を有したとされる「立石土塁」の痕跡が残存しており、この「立石土塁」に代表される中世の居住城が調査地周辺に広がっているものと思われる。国府が府中（現御井町）付近に移転し、何らかの形態をとりながら機能していた時代における、国府故地の実態を解明する上で貴重な情報を得ることができたものと考えられる。



第52図 第243次調査地周辺の主要遺構配置図 (1/1,500)

報告書抄録

ふりがな	ちくごこくふあと だいしゅうはくはつちようきほうこうこく		
書名	筑後国府跡 ー第243次発掘調査報告ー		
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第307集		
編著者名	神保公久		
編集機関	久留米市役所 市民文化部 文化財保護課		
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 TEL:0942-30-9225 FAX:0942-30-9715 Email:bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp		
発行年月日	平成23年(2011)12月28日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因	
		市町村	遺跡番号						
ちくごこくふあと 筑後国府跡 跡、 だいりゅうぎふ 第243次調査	くろめし 久留米市 あづまわち 合川町407-1、 408-1	40203	30112	33° 18' 51"	130° 32' 37"	20110524 ～20110801	547㎡	記録保存調査	
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
筑後国府跡 第243次調査	官衙	奈良 ～平安	掘立柱建物	4棟	土師器、須恵器、黒色 土器、緑釉陶器、中世 陶器、輸入陶磁器、土 鏝、砥石、鉄製品、鉄 滓、ふいご羽口、古瓦、 近世陶磁器	筑後国府城を東西に敷設 された官道の一部を検出 した。官道北側では桁行 5間の東西棟建物が検出 された。また、9世紀代 の地鎮遺構も検出して いる。			
	筑後国府跡 第243次調査	鎌倉 ～室町	溝	5条					
			土坑	1基					
			道路遺構	1条					
			土墳墓	1基					
			地鎮遺構	1基					
			集落	溝	2条				
			土坑	6基					
集落	江戸	溝	2条						
要 約									
第243次調査は、筑後国府Ⅱ期政庁に付随する国司館（9世紀）の北東約150m付近にあたる。周辺で実施された調査では、筑後国府城を東西走行する官道が検出されているが、今回も波板状痕跡など、その一部を検出することができた。また、官道の北側約40m付近では、桁行5間の東西棟掘立柱建物（S B 1）を検出することができた。さらに、筑後国府内では数少ない9世紀代の地鎮遺構（S X 100）を検出することができた。調査地周辺の調査では、中世の遺構も多く検出されているが、今回も14～15世紀代の溝や土坑など多くの遺構を検出することができている。国府存続時期～中世に至る土地利用の変遷を窺い知る上で、貴重な成果を得ることができた。									
土木工事の届出日		平成23年3月15日			遺物の発見通知日		平成23年8月3日 (23文財第464号)		

筑後国府跡

ー第243次発掘調査報告ー

久留米市文化財調査報告書 第307集

平成23年12月28日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印刷 中村印刷株式会社